小規模学校教育論の成果と展望
－岩手県・葛巻町における中山間地域の教育実習－

清　水　　将[1]・菅　野　　亨[1]・村　瀬　浩　二[2]

[1]岩手大学大学院教育学研究科　[2]和歌山大学教育学部

Accomplishment and Prospects of Education of Children in Small-Scale Schools
―Teaching Practice in Mountainous Areas in Kuzumaki Town, Iwate Prefecture―

Sho SHIMIZU・Toru KANNO・Koji MURASE

Iwate University Professional School for Teacher Education, Wakayama University Faculty of Education

概　要

本稿では、岩手大学教育学部が平成15年度より葛巻町をはじめとする県内市町村で実施してきた地域教育実習の成果と共に、課題対応への展望について報告する。ここで取り上げる地域教育実習は、夏季休業中の集中講義として行われる選択科目「小規模学校教育論」の中に、2泊3日の日程で組み入れて実施している。実習に参加した学生や実習校の教員、教育委員会担当者に対して行った調査の分析や考察から、へき地や小規模校の教育に対する学生の認識や意欲が、実習を通して大きく変容しているだけでなく、受入れ校の児童生徒や教員にも望ましい変容が認められた。養成段階に中山間地域に赴いて地域の様子を体験的に知り、小規模校で教育実習を行った経験は、採用後の学校規模にかかわらず、即戦力として活かされることがわかり、地域教育実習が果たす役割が重要であることが明らかになった。

1　はじめに

岩手県では、少子化による児童生徒数の減少[1)]に伴い、県内各地で小規模化や学校の統廃合が進んでいる。小規模校を抱える市町村教育委員会では、所管する学校の適正規模化を図るため、方針や計画に基づいて住民との合意形成を図りながら統廃合を進めているが、児童生徒数の減少に歯止めがかからないため、統合校の児童生徒数が維持できるとは限らず、その後も学級減が進行したり、小規模校が極小規模校に移行して複式学級を設置したりする動きは止まらない。

令和2年度の岩手県内の学級規模別学校数をみると、学校教育法施行規則第41条及び第79条において適正規模とされる12学級に満たない学校は、小学校が210校（総数301校の70％）、中学校が107校（総数149校の72％）となっており、全小中学校の約7割が小規模校であることが分かる。

岩手県は、北海道に次ぐ15,275㎢の面積を有し、奥羽山脈と北上高地が南北に連なるために全域に山間地が広がり、海岸の近くまで山が迫っている地域も珍しくなく、平地は北上川沿いに多く見られる。小規模校は県内の全域に点在し、特に県北地域や沿岸地域に多い。これを受けて、本県では小規模・複式教育を義務教育の重点課題の一つ[2)]に挙げている。

岩手大学教育学部には、小規模校を多く抱える本県の教員養成学部として、地域の未来を担う人材育成に貢献できる教員の養成と共に、小規模学校における教育の特質を理解し、その特質を踏まえた教育を推進できる資質・能力を高める取組が求められる。本学部では、盛岡市から離れた地域の小規模校に学生が出向いて実施する地域教育実習を、葛巻町をはじめとする県内の市町村の理解と協力を得ながら、平成15年度から行ってきている。

本稿では、この地域教育実習を取り上げ、その教育的効果を検証すると共に、成果と課題を整理して今後を展望したい。

2　岩手大学の小規模・複式教育の実習カリキュラム

統合による市町村立学校の減少や小規模化の傾向は、本県はもとより全国的に顕著であることから、教員養成段階での小規模校に関する学修の必要性については論を待たないであろう。本県においては、全小・中学校の約7割が小規模校であることから考えると、教員に採用された後のいずれかの時点で、小規模校に勤務する機会が必ず訪れると言ってよい。

岩手大学教育学部附属小学校には、各学年3学級の通常

学級とともに、1・2年生、3・4年生、5・6年生から構成される複式学級（各学年定数8名）が設置されており、これまで小規模・複式の指導に関する研究実践に継続的に取り組んできている。複式学級の設置は師範学校時代にまで遡るが、その実践や成果は、公開授業研究会や研究紀要等を通じて県内外に発信されると共に、岩手県教育委員会が主催する研修会への協力や学校のニーズに即した現職教員研修の受け入れを通して、小規模・複式の教育の充実、発展に寄与してきている。

岩手大学教育学部では、附属小学校の複式学級を活用した実習と、県内の市町村教育委員会と連携した小規模・複式に係る教育実習をカリキュラム化し、教育実習の充実と学生の小規模・複式教育に関する知見を高めることを目的に、附属学校改革専門委員会による検討を重ねながら小規模・複式の教育実習カリキュラムを策定し、改善を行ってきている（表1）。

表１　小規模・複式教育の教育実習カリキュラム

学年	内容
１年次	◎観察実習（10月に1日） ・附属小学校複式学級の授業参観【必修】
３年次	◎科目「教育実習研究」（6月に１コマ）【必修】 ・講義と演習：「複式学級の経営と指導」 ◎主免実習（8・9月に４週間） ・附属小学校複式学級の授業参観【必修】 ・複式学級での主免実習【配属学生】
４年次	◎科目「小規模学校教育論」（8・9月に4日）【選択】 ・講義と演習（集中講義） ・県内の小規模校での地域教育実習（3日）
教職大学院	◎科目「岩手の教育課題」（1年次前期） ・講義と演習：「小規模・複式の教育」 ・附属小学校複式学級の授業参観と協議

小学校を主免とする1年次学生が対象となる観察実習では、授業参観を通して複式学級の形態と複式指導の実際にふれ、小規模・複式教育に対する関心を高める機会としている。

3年次学生が対象の主免実習では、事前の教育実践研究での複式学級の経営と指導に関する講義・演習を実施し、実習中には複式学級の授業参観、複式学級配属の実習生による授業提案及び研究会を通して複式指導の基本を学んでいる。

4年次以降では、選択となるが、地域教育実習において、盛岡市から離れた地域に宿泊しながら、小規模校での実習体験を通して小規模教育を実践的に学べるようにしている。夏季休業中の集中講義として開講される「小規模学校教育論」の中に組み入れられており、教育学部の学生であれば、所属コースにかかわらず、履修することができる。

教職大学院では、「岩手の教育課題」という1年次の必修科目の中で、小規模・複式教育に焦点を当てたプログラムが用意されている。へき地の特性や小規模校の特徴を整理しながら、現代の教育課題の解決や地域社会と密接に繋がる特色ある学習指導や学校づくりのモデルとしての可能性を追究する演習、附属小学校複式学級の授業参観及び協議から成っている。

３　地域教育実習の実際

（１）これまでのあゆみと葛巻町

岩手大学教育学部は、平成14年度に、附属教育実践総合センターに複式学級・小規模学校研究プロジェクトを設置し、授業形態の研究や学習指導案データベースの構築をはじめ、複式指導の充実に寄与する様々な取組や支援を行ってきた。地域教育実習は、平成15年度から主免実習を終えた学生を対象に、年度によって異なるが、葛巻町、普代村、遠野市、八幡平市、西和賀町等において、市町村教育委員会や小・中学校の協力を得て県内各地で実施されてきており、平成30年度からは葛巻町１か所となっている。

葛巻町は、岩手県北東部の山間地域に位置し、標高1000m級の高地が連なり、総面積の約86%を森林が占め、酪農や林業が盛んで、ミルクとワインとクリーンエネルギーの町として知られている。岩手大学から町の中心部までは、車で約1時間20分程の距離がある。人口減少に伴って学校統廃合が進み、町内の小・中学校は計7校になったが、ふるさとキャンパスプロジェクトや4校種連携、ふるさと学習、葛巻高等学校に全国から留学生を受け入れる山村留学制度の導入など、特色ある施策を掲げて教育の充実に力を入れており、地域教育実習を平成15年度から継続して積極的に受け入れていただいている。学校毎の児童生徒数は、表2のとおりとなっている。

表2　葛巻町内の学校（令和2年度）

学校名	児童生徒数	通常学級数
葛巻小学校	108	6
小屋瀬小学校	28	3
江刈小学校	29	3
五日市小学校	23	4
葛巻中学校	63	3
小屋瀬中学校	14	3
江刈中学校	27	3
葛巻高等学校	131	6

（２）小規模学校教育論

「小規模学校教育論」は選択科目であり、前期の8～9月に4日間の日程で集中講義として開講している。夏季休業期間であるが、教員採用試験2次選考の日程とできるだけ重ならないように、試験が始まる前のお盆明けに1日目を、終了後の9月下旬に2～4日目を設定している。この科目は、

小規模校における教育に関する講義や演習と共に、実際に県内の小規模校及び複式学級を有する小・中学校で行う教育実習を体験することにより、総合的で現実的な識見を養うことを目的としている。そのねらいは表3のとおりである。

表3　地域教育実習のねらい

- 小規模校を取り巻く地域の特徴及び家庭や地域とのつながり
- 小規模校における子供の実態と課題
- 小規模校の教育の特質と特色ある学校経営
- 小規模校における少人数教育及び複式指導の実際
- 小規模校を有する教育委員会の方針とその取組

全4日間の講義と演習及び小規模校での教育実習を通して、理論と実践の融合を図りながら理解を深めることを目的としたプログラムになっており、初日は大学での講義と演習、残りの3日間は県内の小規模校での教育実習と地域理解実習の流れで進めている（図1）。

6月　地域教育実習説明会
［申込締切（人数掌握）、関係機関と連絡調整］
▼
8月　①講義と演習、教育実習ガイダンス（1日）
地域教育実習に向けて指導案作成等の準備
［主免実習（4週間：3年次必修）］
▼
9月　②地域教育実習（3日間）
▼
10月　副免実習（2週間：4年次必修）

図1　小規模学校教育論の流れ（4年次対象の場合）

初日の講義と演習では、県内の小規模校の現状、県教育委員会の施策、へき地・小規模校の教育活動の特色、少人数の単式学級や複式学級の学習指導の在り方等について学修する。また、ガイダンスを通して3日間の実習への見通しを持たせるようにする。年度によっては授業体験が設定されることもあり、その場合は、担当者が実習校と実習生の間に入って調整をしながら、授業者を中心にチームを組織して授業準備を進めることになる。

（3）地域教育実習の内容

実習は、2泊3日で行う。実習校の予定と合わせて実習計画を立てるために、年度によって日程や内容は一部異なるが、概ね表4のような内容で実施される。令和元年度は、9月25日(水)～27日(木)に開催した。

表4　地域教育実習の内容（令和元年度）

一日目	**小規模校実習①**（江刈中学校） 学校経営講話、校舎見学、授業参観、 給食、清掃活動、 授業体験、授業研究会、 部活動見学 リフレクション（葛巻町内泊） **紹介式**
二日目	**地域理解実習**（葛巻高原牧場、葛巻小学校） 地域理解講話（教育長、観光課職員）、 牧場見学及び体験、風力発電所見学、 葛巻町小・中学校駅伝継走大会見学、 リフレクション（葛巻町内泊） **牧場見学と体験**
三日目	**小規模校実習②**（小屋瀬小学校） 学校経営講話、校舎見学、複式授業参観、 給食、清掃活動、 授業体験、授業研究会　等 **複式授業の参観**

3日間のうちの2日間は、町内の複数の小学校や中学校を訪問し、校長講話や校舎見学を通して小規模校の学校経営を捉えたり、授業参観や授業体験、研究会を通して少人数の児童生徒に対する授業の手立てや工夫を理解したり、休み時間や給食指導、清掃活動を通して児童生徒とふれ合ったりして、小規模校に関する見識を深め、もう1日は、葛巻町の教育やまちづくりに関する講話や施設見学、体験を通して、地域への理解を深める内容となっている。

令和2年度は、新型コロナウイルス感染症対策のために1泊2日に縮小となり、大学での講義と演習を2日間に増やした内容に変更された。また、令和3年度は、岩手県による緊急事態宣言のために実施直前で中止となった。

4　受講生の意識変容

地域教育実習に参加した令和2年度の受講生に対して、実習終了直後にアンケートとレポート、翌年の採用後にインタビューを実施して意識の変容を調査した。

（1）アンケートの分析

実習終了後のアンケートを分析した。（4年次16名、院生1名、回収率100％）

> 質問1　実施時期はいつが適切だと思うか。
> 回答）9月下旬（59％）
> ・教員採用試験が終わり、夏季休業中だから。
> ・主面実習、副免実習の前後がよい。

主免実習や採用試験と重ならない9月下旬の実施が約6割を占める。町教委や実習校も9月下旬でよいと回答しており、この時期が最適と考えられる。

> 質問2　葛巻町での地域教育実習はどうだったか。
> 回答）とても満足（100％）
> ・豊かな自然に恵まれ、葛巻町独自の制度もあって多くのことを学ぶことができた。
> ・人々が葛巻町に対して愛情や誇りをもっており、とても温かい場所だと思った。

主免教育実習とは異なる特色ある教育の姿にふれて刺激を受けている様子が分かる。小規模校や葛巻町への関心の高まりも見られ、葛巻町は、地域教育実習に最適であると考えられる。

> 質問3　複数市町村での実施がよいと思うか。
> 回答）そう思う（53％）、そう思わない（47％）
> ・地域に合った特色ある教育方法が学べる。
> ・葛巻町以外の実践も見たい。
> ・自分にあった場所を選択できるから。
> ・現状で満足している。遠いと移動が大変だ。

肯定的な意見と否定的な意見が約半数に分かれている。実習生が20名程度であれば、現状の教育実習で済むが、多くの実習生を受け入れるには他市町村に広げて計画する必要がある。

> 質問4　日程はどれ位が適切か。
> 回答）2泊3日（65％）、1泊2日（29％）
> ・短いと先生方と話す時間が十分に無い。
> ・1泊2日はハードスケジュールに感じる。
> ・1日目に児童とふれあい、2日目に授業を体験し、3日目に地域を知るのは魅力的だ。
> ・慣れない土地で疲労が大きく、短くてよい。

2泊3日が適切との回答が約2/3を占めた。実習校の教員や児童生徒と十分に交流できるようにゆとりをもたせる工夫が必要である。

> 質問5　参加対象は、何年次の学生が適切か。
> 回答）4年次（53％）、3年次（29％）、3～4年次（18％）
> ・4年次は様々な実習を経て指導力や対応力がある。進路が決まり、教師になる意識も強い。
> ・主免実習での経験を経た上での参加がよい。

経験を積んだ4年次学生が適切との意見が多いが、主免実習を終えた3年次からがよいという意見も半数近くあった。3年次も対象に加えると実施市町村や実習校を拡充する必要があり、実習の在り方を総合的に検討すると共に、場合によっては教育実習カリキュラムを修正する必要がある。

> 質問6　その他（意見や要望等、自由記述）
> ・実習は主免の学校だけでよい。
> ・小・中両校の実習が深い学びに繋がって望ましい。
> ・小規模教育実習を希望制から必修にしてもよい。

4年次の学生は教員採用試験を受験し、進路の校種が確定している。令和3年度は小・中の2つのコースに分かれて実施予定であったが、中止となったため、引き続き検証を重ねる。実習の必修化については課題として後述する。

（2）レポートの分析

実習の事後指導としてのレポート（4年次16名、院生1名）をユーザーローカルテキストマイニングツール（ https://textmining.userlocal.jp/ ）を使用して分析した（図2、図3、図4）。

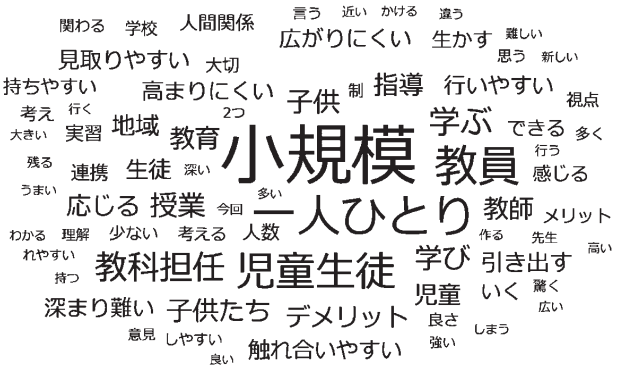

図2　ワードクラウド

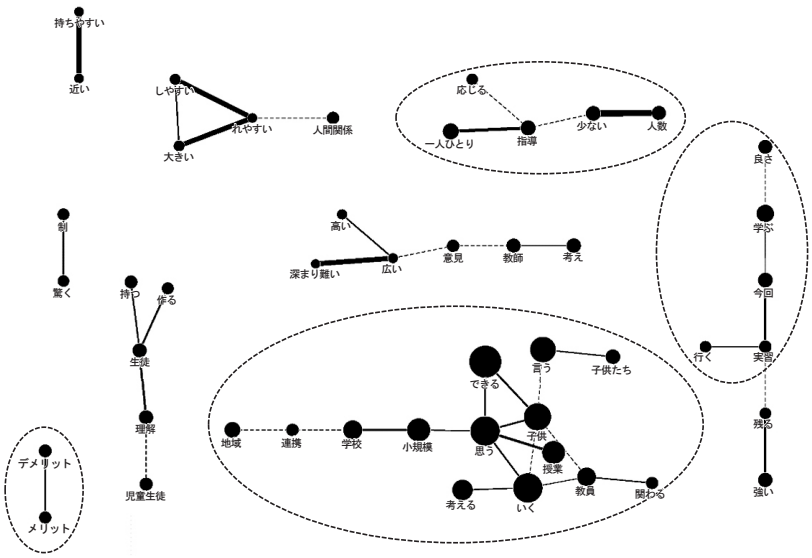

図3　共起キーワード

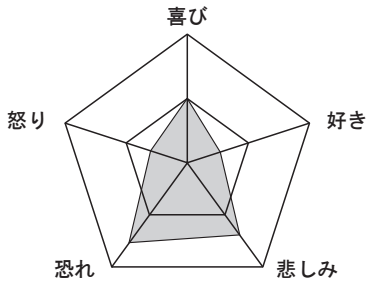

図4　感情の度合い

概観すると、実習によって小規模校での授業づくりと教員としての姿勢が学ばれ、少人数指導のきめ細やかな指導、地域と学校との連携、教科担任制の導入等が強く印象に残り、一方で自分が複式学級の指導がうまくできるのであろうかといった不安が示されていた。体験を通して、「小規模の学校であるからこそ、すべての教員で子どもを見守っている」「小規模学校ならではの良さだと感じたのは、一人ひとりにきめ細やかな指導ができたこと」「多くの教員が子どもに関わるため子どもの問題等にいち早く気付くことができること」などが記述されている。葛巻町の教育の現状や課題を具体的に捉えることによって、地域の課題である「教育に力を入れることで、地域が活性化し、これからの未来を切り開いていく子ども達を支援する」という教育のあり方についても多面的かつ実践的に考えていることが明らかになった。少人数指導によって「人間関係の大切さ、児童生徒理解のポイント」が顕在化することも特徴的であった。学校規模にかかわらず、「子どもを多面的に見る」ことや「子どもの意見が固定化しないように、教員が違う視点の意見を述べて考えを揺さぶる」ことなどの多様性の確保に対しても学びが深められている。また、「複式の子どもは通常学級の子どもに比べて学力が高く」、「間接指導の際に子どもがどんどん伸びていく」ことも実感として捉えられ、複式学級を含む少人数学級ならではの学習指導や生活指導に関する知識や技能など、教師として育成すべき資質・能力が身に付いただけでなく、教壇に立つ意欲の向上に関する記述も見られたことが小規模学校教育論の成果と考えられた。

（3）卒業後の聞き取り調査の分析

令和2年度に小規模学校教育論を受講した17名のうち、岩手県内各地の小・中学校に正規採用されて勤務している教員10名を対象に、約1年が経過した現在における地域教育実習の認識を電話による半構造化インタビューによって調査した。（令和3年8月実施、10名）

質問1　地域教育実習での体験は現任校での仕事に役立っていると思うか。
- 役立っている。（10名）

質問2　具体的にどのような点で役立っているか。
- 地域のことを知った上で指導することを心がけている。そうすると指導が面白くなる。
- メリットとデメリットを考えて仕事をする大切さが分かり、デメリットを上手く活用できないかと思考している。そこに全てがあると知った。
- 一人一人の姿を見取ることに実習の経験が生きている。35人を担任しているがそこは同じだ。
- 放課後の個別指導の際に、子どもへのかかわり方やペースを思い出して指導している。
- 勤務校が都市部なので、葛巻の自然や良いところ、県内の様々な地域の様子を児童に紹介している。

質問3　参加しないと違っていたと思うことは何か。
- 個別指導での教え方。実習の体験が生きている。
- それまでは教材を使って何となく教えていたが、子どもの実態や地域性などの実態に即して指導するという視点が増えた。
- 人数が少なくてもいろいろな生徒がいることや子どもへの配慮が自分に欠けていたことが分かった。学生のうちに見方や考え方が広がった。
- 盛岡以外の学校を知らず、こういう学校があるんだと思った。直接見た経験は大きかった。転勤して赴任してもショックを受けないと思う。
- 教員になる前の最後の実習だった。岩手の教育課題を学んだり、小規模校を見たりして、様々な視点で現任校を考えることにつながっている。

質問4　その他（1年後の今に思う意見や要望）
- 小規模校の見学を必修化するべき（4名）。岩手の人は特に必要。岩手のよさも課題もここにある。

質問1、2からは、地域教育実習での体験が現在の地域や校種、学校規模に関係なく、現任校での仕事に役立って

いることが窺える。回答者のうち9名は、比較的規模の大きい都市部の学校に勤務しているが、無関係とは捉えずに、地域とかかわる、個とかかわる、人数や施設が限られていても工夫するなど、実習を通して学んだことを指導に活かしていることが語られた。

質問3からは、学習指導の仕方、子どもや学校に対する見方など、実習を体験することによって視野が確実に広がっていることが語られた。また、葛巻の自然や良いところだけでなく、県内の色々な地域の様子を都市部の学校の児童に広めている。全校児童数約100名の小規模校に勤務している回答者1名は、「実習に参加して本当によかった、今に役立っている」と実感をもって語っており、初任が小規模校になった場合には、本実習の有効性は非常に高まることが示唆された。

質問4では、調査者の全てが学生の間の小規模校体験の有効性を改めて主張している。4(1)に示した、実習直後のアンケートでは、葛巻町での地域教育実習への満足度が100%であり、教職経験を積んだ後であってもその成果は継続している。指摘される必修化については、今後の大きな検討課題である。

5　受入校や教育委員会の受け止め

地域教育実習がもたらした成果を実習受入校及び葛巻町教育委員会にアンケート及び聞き取り調査を行った。（令和2年10月実施）

（1）実習受入校（2校）

- 年齢の近い学生達と触れ合うことや授業をしてもらうことは、子ども達にとって貴重な体験である。子ども達は意欲的に授業に取り組んでいたし、学生達の創意工夫を感じた。主免実習を終え、自信をもって授業をしていると感じた。
- 本校の生徒にとっては、学生が授業をすることで普段の授業とは違う新しい学びができたと思う。お兄さんお姉さん的な存在の学生から学ぶことはたくさんあり、あこがれを抱く生徒もいると思う。若く熱意あふれる実習生の姿は生徒の表情を明るくするものだった。
- 新鮮な気持ちで学生達の授業を見たり、自分達に足りないヒントを得たりと、教員にとっても貴重な機会になった。
- 地域教育実習は子ども達にも教師にもよい刺激である。単独の教育実習は関係のある学年が中心になって関わる子どもが限定され、実習しているという感じがない時もある。今回は多くの学生が来校し、どの子どもとも触れ合う機会があって良かった。今後もこういう実習が続くとよい。
- 教育実習期間は、教職員が日本、岩手の宝である若手教員を育成するという意識をもって教育活動を行えるよう管理職として働きかけていきたい。

学生が実習校を訪問して児童生徒と交流したり授業体験をしたりすることは、児童生徒にとってだけでなく、教職員にとってもよい刺激をもたらし、学校全体が活性化されている。小規模校の子ども達は、外部の人間と接する機会が少ない傾向にある。受入側の実習校では、学生が児童生徒と一緒に活動することは児童生徒が成長するよい機会であると捉えており、学生達の訪問に大きな期待を寄せていることがわかり、このような地域に存在する学校のニーズに応えていくしくみをつくることも課題である。

（2）教育委員会

- 町内の児童生徒にとって年齢の近い実習生の授業を受ける機会を得られることは貴重な体験であり、生活や学習意欲の向上にも繋がっている。
- 町外から来た実習生が町を知り、町や学校をよく思っていることが児童生徒に伝わり、町や学校、自分達のよさへの気付きが、自信や自己肯定感の醸成に繋がっている。
- 昨年度の実習生が新採用で町内の小学校に1名配置されたが、若手教員として意欲的に勤務している。町内の学校への赴任希望の増加に期待している。
- 教員にとっても、刺激を受け、日常の指導を見直すよい機会になっている。
- 本町の教育やまちづくりに関する講話、施設見学や体験等の地域理解実習を通じて、学生達の町への理解が深まっている。町への理解が、関係人口の創出や特産品の消費にも繋がっている。
- 教育実習は、学生達が町にかかわるきっかけになっており、町の再訪やイベントへの参加が見られる。町民と若い世代とのかかわりが生まれていることを嬉しく感じている。町の産業である酪農に携わる人や葛巻高校生との交流等、地域理解実習の工夫に努めたい。

教育長からの聞き取りにおいては、実習校と同様に、実習に対する肯定的な捉え方がなされている。また、教育の面に留まらず、まちづくりの視点においても、実習の成果や影響が表れている。

6　成果と今後の展望

本稿では、岩手大学教育学部が葛巻町で行っている地域教育実習について検証した。実習に参加した学生や実習校教員、教育委員会担当者に対して実習後に行った調査の分析や考察から、へき地や小規模校の教育に対する学生の認識や意欲が実習を通して大きく変容していることが明らかになった。また、受入れ校の児童生徒や教員にも望ましい変容が認められ、地域教育実習による成果が確認された。

葛巻町は、まちづくりの観点から町外の人々との交流に力を入れており、町内の子ども達の育成や教員の力量形成

のために地域教育実習を活用しようと、本学学生を積極的に受け入れてきた。昨年度は教育委員会からの提案を受けて、1日目の夜に学生と葛巻高等学校の山村留学生が交流する場を設けたが、進路選択について相談した高校生に学生がアドバイスを送ったり、親元を離れて目標をもって学習に励む高校生から学生が刺激を受けたりして、双方が感化し合う様子が見られた。

葛巻町農林課とのつながりも生まれ、令和2年度の実習終了後には、牧草ロールにメッセージやイラストを描く仕事の依頼があり、実習した学生の中から5名が制作に協力した。葛巻町を再訪し、アイディアを練ってペイントを完成させている。その際の感想では、「葛巻町を再訪して自然を感じながらペイントをしたり、地域住民である役場職員や関係の方々と接したりする中で、山間地域への親しみを感じながら改めて葛巻町のよさを体感した」ことが語られている。牧草ロールという地域の産業やその課題解決という地域作りの活動に参画した貴重な体験が、地域に必要とされる教育内容を考える方法として機能している。山村留学生や地域住民と接することは、地域理解実習の充実にもつながり、これも地域教育実習の成果の一つといえるであろう。

図5　完成した牧草ロールと制作に携わった学生

現状における地域教育実習の課題を記して今後の展望としたい。まず、実習のプログラムについてであるが、地域教育実習は小規模校実習と地域理解実習から構成されている。昨年度は新型コロナ感染症への対応により、日程を1泊2日に短縮し、地域理解実習の内容を大きく削減した。実施の結果、その必要性に関する認識が新たに形成された。学校は、地域（市町村）の歴史、文化、住人との結び付きなど、地域から様々な影響を受けて成り立っている。地域教育実習というプログラムは、学校体験のみで終わってはならず、町づくりや教育施策に関する講話、町の代表的な施設の見学や体験、地域行事の見学や参加などを組み入れて、地域に対する認識を深めることが重要である。本学を取り巻く現況から総合的に考えると、地域教育実習の日程は2泊3日が妥当と考えられるが、地域理解を大事にしたプログラムは、今後も工夫して取り入れる必要がある。

コース設定については、4年次の学生は7月に教員採用1次試験を受験しており、卒業後に進む校種が明確になっている。地域教育実習は8～9月のため、令和3年度はコース選択制を取り入れて、小・中コース別での教育実習に変更した。同じ学校で2日間過ごすことによってスケジュールの慌ただしさが解消され、児童生徒、先生方との交流も増し、小規模校の姿を深く観察できるメリットが生じると考えられるが、今年度は実施できなかったため、継続して検証したい。

参加対象学年については、過去には2年次以上とした時期もあったが、アンケート結果からも明らかなように、主免実習を終えた学生を対象にするのが適切と考えられた。3年次の主免実習では、授業への対応や児童生徒とどう関わるかで精一杯になりがちで、学校と地域との関係や特色ある学校経営には考えがなかなか及ばない。4年次になると、2年次、3年次での観察実習や主免実習の体験を想起しながら、学校の姿を比較して考察し、学校の特色やその背景、指導の工夫に関する具体的な考察も期待できる。教員採用試験を受験し、来春から教壇に立つ意欲が高まっている4年次がより望ましいと推察される。

小規模校での授業参観の必修化に関して、学部においても検討課題とする意見がある。今後、議論を重ねながら条件を整えつつ検討を進めたい。現状の教育実習カリキュラムでは、附属小学校の複式学級の参観があるが、地域の小規模校での参観は組み込まれていない。附属小学校は、大規模校に併設されている学級であり、小規模校の学級とは異なり、その特徴を理解するための設定が必要であろう。本学から比較的近い場所にある盛岡市周辺の小規模学校の訪問を位置付けることも考えられ、例えば、2年次学生を対象に本学近隣の小・中学校で実施している連続5日間の学校体験実習の日程から1日を別の小規模校での必修の参観実習として充てることも考えられる。その関連・発展として、4年次に地域教育実習を位置付け、小規模校教育実習を充実させるカリキュラムを描くことも検討したい。移動や宿泊に伴う学生の経費負担が大きくならないように、交通費や宿泊費の予算確保や経費補助の措置への配慮も必要となる。

7　おわりに

小規模校が多い岩手県では、初任者が小規模校に配置されるケースも珍しくない。アンケート調査から明らかになったように、地域教育実習に参加した学生は、小規模校の学校や児童生徒の理解が深まった結果、好い印象を抱いており、消極的な考え方を示さなかった。養成段階に中山間地域に赴いて地域の様子を知ると共に、小規模校で教育実習を行った経験は強く心に残り、実際に赴任した際に強みとなることも推察される。

その意味からしても、地域教育実習が果たす役割は重要である。中山間地域や沿岸地域に位置するへき地には、その土地ならではの自然や歴史、そこに暮らす人々の魅力が

あり、そのような環境で育つ児童生徒のよさがある。へき地や小規模校の教育について尋ねると、よく知らないためにマイナスのイメージを抱いている学生が多く見受けられる。地域教育実習は、講義と現地での実習を通して、へき地や小規模校の特色や可能性を包含した魅力に気付かせることにつながり、イメージをマイナスからプラスに転換する機会を提供する役割をもっている。地域教育実習の体験は、教員として初めて赴任する際の不安や抵抗感を取り除く力にもなっているのである。

本稿の執筆中に、本年度の地域教育実習が新型コロナ感染症の拡大に伴う県の対策によって中止となった。人口減少及び充分な医療サービスの確保の問題は、実習だけでなく、地域の課題そのものである。感染への対応を踏まえた新たな教育実習の在り方を整備する際には、学生も参加させることによって、より一層地域の課題を深く知ることにもつながると考えられる。

今後も、岩手大学と葛巻町、学生と実習校の教員及び児童生徒、全てにとって有益なよりよい地域教育実習を求めて改善を継続する必要がある。教員養成学部としての使命を果たすべく、関係各位の協力を得ながら小規模校教育の充実に資するプログラムを提供し続ける努力を重ねていくことを確認して結びとする。

謝辞

本研究は、JSPS科研費基盤（B）課題番号18H01003の助成を受けたものである。

注記

1）2021年度の学校基本調査によると、本県の児童生徒数（小学生、中学生、高校生の合計）は116,465人で、前年度比2,596人の減、2011年度比29,673人の減となっている。

2）岩手県教育委員会（2020）学校教育指導指針，pp.27.

参考文献

阿部真一（2019）小規模・複式教育の系統的・実践的な学びのカリキュラム－附属小学校と地域の小・中学校との連携を通して－．令和元年度日本教育大学協会研究集会発表概要集，pp.110-111.

阿部真一，清水将，立花正男，菅野亨，村瀬浩二（2020）小規模校に必要とされる複式指導の知識に関する検討．岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要，（19）pp.49-58.

川前あゆみ（2010）へき地生活体験・へき地教育指導体験と地域に根ざす教師の育成．日本生活体験学習学会誌，10，pp.23-33.

川前あゆみ（2019）へき地教育プログラムの必要性と構造化の取り組み～へき地教育実習・講義の体系化と教育効果を中心に～．へき地・小規模校教育研究センター紀要，（74）pp.1-8.

村瀬浩二，清水将，本山貢，寺川剛央，豊田充崇，（2020）教育実践による地域活性化事業の取り組み－感想文の分析から－．岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要，（19）pp.41-48.

田代高章，板垣健，菅野亨，川口明子（2021）「小規模・複式教育に資する教育実習カリキュラムの開発」（令和2年度経過報告）．岩手大学教育学部教育実践研究論文集，（8）pp.130-133.

田代高章，阿部真一，高室敬，加藤佳紹（2020）「小規模・複式教育に資する教育実習カリキュラムの開発」「小学校専科制のあり方について」「小中一貫教育に係る実施改善案の策定」（令和元年度進捗状況報告）．岩手大学教育学部教育実践研究論文集，（7）pp.99-102.

田代高章，阿部真一（2019）「小規模・複式教育に資する教育実習カリキュラムの開発」（経過報告）．岩手大学教育学部教育実践研究論文集，（6）pp.145-150.

豊田充崇（2011）「へき地・複式教育実習」の成果と今後の展望－2010年度教育実習改革プロジェクト報告－．和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要，21，pp.23-30.

屋宮栄作（2016）離島へき地小規模校における観察実習の意義－奄美大島における学校環境観察実習とその教育効果－．鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要，25，pp.303-309.